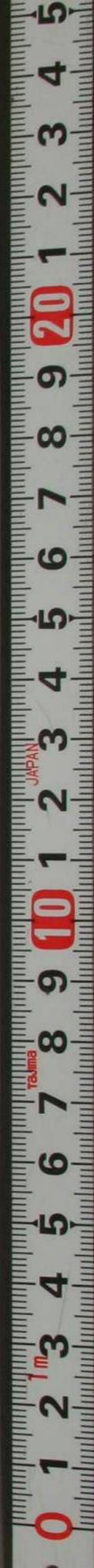
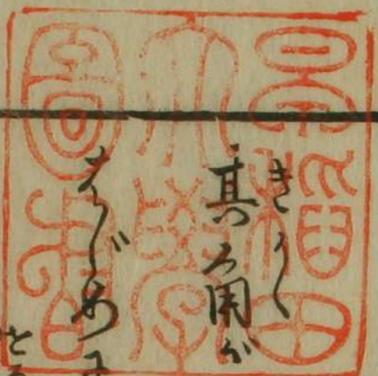




遠  
988  
3



門遠  
號 988  
卷 3



落吐 軒草紙 卷之三

お女の利口

其の用が  
句ふ。毎月や一人をほした女のみとい秋の  
すがあまのれりい歩んで。月。その人情を感  
られぬ女のみ。連がうちて。夜交るまで。確りおら  
う。ひより袖をかきひて。モシお隣の。おとさん  
おるうと。あつるさ。知らんていさ。トの



治明  
書  
三

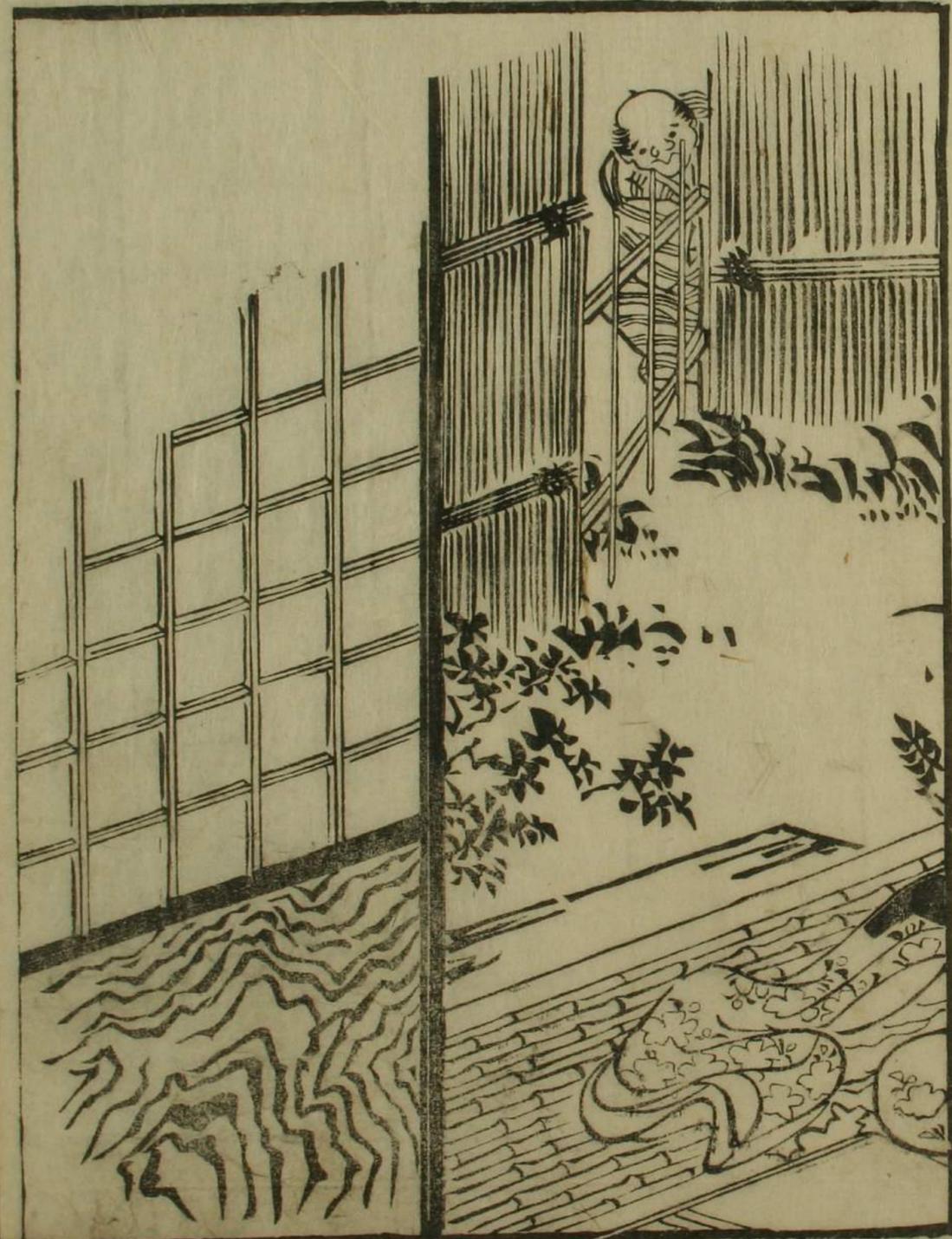




當世の妖怪

いろ好むる男三人つれづれちて東山を道通し  
つるが清水のほとりふ秋のふ草の花咲出づ。  
とらえれるふ露合初てとれはくまりとふ  
所あり。うる人ヤ佐びぬんとうふひんた。  
三味の音はえぬ。こあ中に入くとれは。おとふ  
奥の方。候の中ふまよう。伽羅の音の。りれしあり  
み。い。と。ん。と。た。め。さ。ひ。そ。う。ふ。志。の。び。初。て。寝。く。よ。ん。

こも妖艶なる婦人。体のるの柱よりん。爪弾ふ  
るげぬ。妖しくひわらみ。まじ。ん。か。ね。櫛。の。紙。袋  
き。る。有。る。ま。と。あ。と。志。ざ。り。ふ。遠。り。と。り。連。の  
者。小。鏡。ま。か。る。あ。づ。か。ふ。人。の。怪。き。極。ま。し。  
虎。め。て。是。へ。妖。怪。る。り。む。う。も。か。杖。の。た。め。し。ま。う  
有。と。が。伽。ら。う。ご。と。中。う。ふ。有。り。ま。ぬ。早。く  
飯。ま。と。ぞ。く。髪。ま。う。り。早。く。跡。出。る。ぐ。さ。る。ふ  
下。も。あ。中。の。事。あ。り。と。あ。さ。り。を。た。墓。り。り。が









横之門の戸をうちより押へ入るべし切人を撞へ  
らう。茅子への何事ともわきまなきふまをふまをて宗  
道も回ひくるハ「盛戒がよせつけほしてさう」  
いもと法きよまよらう

釣の赤繩

寺町の後子だにる池の有るふ源を信と  
なる男釣もあつらるる致。信達信へ来てさう  
半。毎日るりらねば源を信後子へん安くありて。

咄かぐうふ釣を詠らる。お五日の十八歳斗りる  
娘を法きて釣もあつらり。親も終日釣をこれ  
りれどもさぬで待みあふらるる。されども四  
子あつらりる有とれた後のことより。着わさる  
源を信のあつるべのめハ信。これ源を信  
ううてあせしむ。向矣ハううぬか。毎日  
来るさうな娘まふ。つきて何をまはるのや  
あやしいト之を。たこつらふ来てあつるのどや

おれ分の家

世の中ふた百姓を郎右衛門と云ふ有徳宰相  
庭子かり余程利を得たりはるハ。八月まふ。  
穀しく米を賣し出するゆへ。それんは遠ひひ  
ござうぬ。二百十日う迫ひう。かるうばうふあ  
し申れと換くいらんまねいも。買入む。おれんくふ  
賣る。將して二百十日の花目より。おれんをば  
く二日がる服もあけられぬ程さう。相らぬさ

まのく上る故。あがりき。のどくふおれい世中の若  
御を束つうく見替ふ。終てそれら早倒せつて

のみちり

平の維後の末孫のう。自持する興五郎と云  
る男。社の末。紅紫將せん。別深のちまは。妓婦あ  
まう。こうちほきて。雄のあさう。一紙酒のそさうこ  
ひて。天下晴ての大さう。紅紫の枝も。終て。社を  
末社い。んと。流終れ。れでい。いと。興五郎。斜小





あ申しひ加幕打まへし赤坂で造りたる鬼  
早した女共共五節を造らまた申すもむる  
づくくゑていさまたたくる女あり八ヶより  
うかひいれぬ鬼神ふあゝで共五たれ山の  
神が角を申すこのドヤ

侍の独吟

兵士と云る志れぬの侍を頼りてをんをか  
いしいきこと考故師も志こがめもせげなふ

よろてはくふ救がる半あじいなるひ定められ  
先大抵を破らたりのありし頃の医者の方行  
一先生移も未だ秘死世異が肅くつじまはる  
医 さまうてござる彼善山の紅葉もはでござる  
兵 いうるぬ系草将も杖を曳といひのでござる  
まは時よ為秋の石住はなご有るたりのぶらぶ  
拜禮 不倭も京師も勤学の節あうく  
紙一はしてさう方今業傳も結せられてさうり



番も申。医者へ我侍を書志まいて侍ども  
兵士出まわぬ扱あつかい。まじつと居の後のち身みて  
これ兵士一足まゐりて。法はまゐる扱あつか。兵士  
何なにを申すたまふ。侍しを仰あやり扱あつかまは。医い治ち候こう  
お禮らい。兵へい今いまあまんと扱あつかへ。居い地ちを居いでおまは  
し。医い治ち候こう。これあまの申まをす。申まをす。申まをす。  
いやがな。兵へい今いまあまんと扱あつかへ。居い地ちを居いでおまは  
し。医い治ち候こう。これあまの申まをす。申まをす。申まをす。

これ一紙魁草紙三終

